

例会報告 Rotary



社会奉仕委員会

- 例会日 毎週金曜日 12:30~13:30
- 例会場 高山市花里町 3-33-3 TEL 34-3988
- 会長 下屋勝比古
- 幹事 塚本 直人
- 会報委員長 挾土 貞吉

世界に希望を生み出そう

＜会長の時間＞

副会長 大村 貴之

今年も2か月経過しました。1月1日に起きた能登半島地震で被災された方々は、長くつらい2か月を過ごされておられると思います。

改めて被害状況を確認したところ、2月28日時点で 死者241名、負傷者1,299名、住宅被害全壊7,737棟 半壊12,681棟 床上浸水6棟 床下浸水19棟 一部被害57,260棟となっております。また、避難者数11,625名と、今なお避難所生活を送られている方が多くおられます。

能登半島地震で発生する災害廃棄物も多くなっています。石川県は、倒壊した建物のがれきなどの災害廃棄物が、県の年間のゴミ排出量のおよそ7年分に相当する244万トン発生すると推計しており、その中でも珠洲市は、市の年間のごみ廃棄物量のおよそ132年分に相当する58万トンになります。廃棄物は解体現場で分別を行い、仮置き場に運んだあとトラックと船で県内外に輸送することとしています。そして244万トンのうち、206万トンは県内の施設で、38万トンは新潟、富山、福井の施設などで処理するとしています。また、また全体のおよそ半分の120万トンは県内で再生利用するようです。令和8年3月までの2年間で処理を完了する目標計画が出されましたが、莫大な費用と期間が必要となります。

震災が起こってからすぐに友好クラブである「台北東海ロータリークラブ」よりお見舞いのメッセージとともにお見舞金1,243,000円が当クラブに送金されました。当クラブでは、「台北東海ロータリークラブ」の想いと支援の方法を2月2日の例会にて皆さんにグループディスカッションで議論していただきました。

例会と理事会の承認をいただき結論として、「台北東海ロータリークラブ」と当クラブの支援金を甚大な被害を生じた石川県へ届けるため、ロータリーの友2月号で『寄付のお願い』掲載されていた国際ロータリー第2610地区『令和6年能登半島地震災害支援本部』に送金することを決めました。2月9・16日・3月1日の3回の例会時に会員に募金箱を回し協力していただき921,500円、クラブの特別会費会計より378,500円を上乗せして130万円を当クラブの支援金としました。

理事会で「送金だけでは価値がないのではないのか？」という言葉に、「被災地のガバナーに渡してどうか？」という提案をいただき、下屋会長が第2610地区 原 勉ガバナーにご相談したところ、大きな被害に遭われた『七尾ロータリークラブ』が例会を再開するので、ぜひ一緒に例会参加しませんかとお願いをいただきました。例会が当クラブと同じ金曜日でありましたが、会員皆さんと「台北東海ロータリークラブ」の想いを伝えるため、本日下屋会長と平康裕さんが七尾ロータリークラブの例会に参加しております。訪問の様子は後日、下屋会長よりご報告いただきたいと思います。



最後に、被災された方がいつもの生活に戻れますよう、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

＜出席報告＞

出席者数	会員数	出席率
20名	36名	58.82%

＜幹事報告＞

◎高山市教育委員会 学校教育課長より

・令和6年度高山市キャリア教育でまえ講座担当者の開催について（依頼）

日時 3月13日(水) 14:00~15:00

場所 高山市役所3階行政委員会室

＜受贈誌＞

(社)高山市文化協会 (広報高山の文化 No250)、岐阜県環境生活部人権施策推進課長(人権だより No96)

＜本日のプログラム＞

社会奉仕委員会

委員長 高井 道子

本日の社会奉仕委員会担当例会には、こども食堂ひだこっばんより代表の中田 綾乃 様に卓話をお願いしました。略歴をご紹介します。

中田 綾乃 様は、高山生まれ高山育ちで面白い事、遊ぶ事、自然が大好き、通称はなかちゃんです。17年ほど前、千葉県柏市にあるフリースクールにて、出会った子ども達と人々に魅了され、1年間住み込みでボランティアスタッフとして勤務されました。その後東京都大田区にある、どろんこ、自然保育等行うちよっと変わった保育園にて乳幼児期の子ども達にも魅了され、そちらで9年ほど勤務されました。

7年ほど前地元高山にUターンにて戻り、自身が育った時とあまり変わらない自然環境に嬉しくなるも、そこで遊んでいる子どもがいないことに疑問が生まれ、子どもに関わる、森のようちえん、親子のおさんぽ会、みんなの畑などに関わられました。3年ほど前気の合う仲間と子ども食堂ひだこっばんを始め、現在、不登校の子を中心としたこどもの居場所「こどもの基地ねこのひび」のスタッフとしても活動されています。

本日は「飛騨の子どもたちの現状と課題」と題してお話いただきます。どうぞよろしくお祈りいたします。



例会報告

「飛騨のこどもたちの

現状と課題」

こども食堂 ひだこっぱん

代表 中田 綾乃 様

ただ今ご紹介にあずかりました、ひだこっぱんのなかちゃんです。どうぞよろしくお願ひします。今日は飛騨のこどもたちの現状と課題という、大きなテーマを頂きましたが、私達ご紹介いただきました通りこども食堂をやっているの、前半はその話をさせていただいて、後半に広域的な視点から今のこどもたちの現状についてお話をさせていただいたら、と思っています。



こども食堂ひだこっぱんは「生きてるだけで丸儲け 地域みんなの居場所」を理念として活動しています。こども食堂というと、貧困家庭支援というイメージかもしれませんが、ひだこっぱんの場合はどんな方でも利用してもらうことができご飯も食べられる、来た人がちょっと一息つく事が出来たり、誰かとお話し出来たり、そんな地域の居場所になることを目指して活動しています。設立は2021年6月、開催日は毎月第三木曜日、月に一回です。長期休みや休校等に合わせて不定期開催したり、各種イベント、季節の行事なども行っています。設立の21年、この時コロナの真ただ中でした。コロナが始まって、不要不急の外出やら三密回避やら、あちこちで人との関係性が分断され、自分自身含めてすごくたくさんの方が疲弊して、精神的な部分、もちろん経済的な部分もありますが、苦しさ生きづらさを抱えながらどこにも繋がれないという人が沢山いるのではないかと、思っている中、気の合う仲間と何か自分たちでやれることがあるのでは、と盛り上がり始めたのがこのこども食堂です。一人一人の力は小さく個人個人は裕福でもなんでもなくて何が出来るんだろうかと思ひますが、みんなが集まったら何か出来るかもしれない、なんかやりたい、ということで始めました。ただ、始めるとき多少の苦労はありました。私達最初は、公民館は各地にあって、昔の地域のお祭りとかで使用していた什器食器とか残っているそうだし、活動も広がっていくのではと思ひ、公民館さんやまち協さんに相談しました。しかし、なにせコロナの真ただ中で、クラスターの発生とか外出自粛とか、活動の趣旨には賛同するし応援したいけど、今は止めてくれないか、と言われました。私たちもちろん感染を広げたいわけではないですし、不安を煽りたいわけでもないのですが、こういう時だからこそ困っている方たちっているんじゃないかな、という想いから、なんとかできる形でやろうと、お弁当の配布という形からこの活動を始めました。地域柄の問題も実は出てきて、やるんだしたら本当に必要とされている方に届きたいという思ひから、プライバシーの問題もあり、個別の経済状況のこととか内容を教えてもらう事は当然ないのですが、この地域は貧困家庭が多くある、という事について、市役所に教えてもらって、その地域のまち協さんに相談に行きました。しかし、こちらの言い方もあったんでしょうが、うちの地域はそんなことはないよ、この地域には昔ながらの立派な家がたくさんあるしそれは隣の事ではないか、などと言われてしまひまして、ちょっと失敗だったなと思ひました。私たちはオープンにやっているつもりでも、こういう活動はセンシティブな部分があって配慮が必要なんだなと思ひて、その時は団体に戻って私たちがやりたいことってなんなんだろう、と話合ひました。結果、食支援とか貧困家庭対象という活動ではなくて、誰もが気楽に寄っていきける、気持ちがちよっと軽くなるようなみんなの居場所、という事を本当はやりたいんだよね、とみんな確認して、そこに来てくれる方の中には、もしかしたら現在困っている方も居るかもしれないし、居ないかもしれない。居なくなったらいいな、と思ひているので、だからどなたでも来て下さいね、ご飯ありますよ。みたいな感じでやっています。うちのスタッフは

お母さんたちがほとんどで、今現役真ただ中のお母さんたちもいれば、ひと段落したお母さん達もいて、地域の知恵みみたいなものを、調理しながら教えてもらっています。スタッフの半分以上は移住者の方なので伝統的な飛騨の野菜の使い方だったり、料理の仕方なんかをみんなで学び合ひながらワイワイ楽しんでやっている感じです。イベントや季節の行事なども行っていて、餅つきとかあね返し作りとか、子供シェフが作るご飯の日、という子供達と一緒にのご飯づくりなんかもやっています。今開催日は木曜日にしてしまひて、木曜開催の理由は、当初休校になったり分散登校になったりとかで、親御さんが平日仕事で家にいないけど子供たちは家にいるっていうことが一つ、スタッフの都合というのも大きいです。活動の中心メンバー5~6人中の3人が、下が保育園上が高校生みたいな子育て真ただ中のお母さんたちです。誰かのため何かしたいけれど、自分たちの家庭を犠牲にしなければならぬのでは続かないね、と自分達もいっばい楽しみながら自分たちの居場所であることが大事だと思ひてやっています。

コロナが収まってみんなでご飯を食べる事もできるようになりましたが、実際、私達コロナ禍で活動を始めて、当初自分たちが考えていたのと違うさまざまなニーズがある事や発見、新しい繋がりも出てきました。一つ目は、子どもとか子育て家庭とかだけではなく、近所の高齢ご夫婦、お年寄りの独居の方、介護状態の方、ちよっと障害を持っている方とか、そういう方の中には、家でゆっくり食べたい、知らない人のところに行って集まって食べるというのにはちよっと...という方が結構いらっしやる事が解りました。私たちは、みんな集まってワイワイやるのがいいなと思ひていましたが、そういうニーズだけじゃない、という事で、私達ご近所にお弁当とか配達します。もちろん取りに来られる方もいますが、そういう時にチョイチョイ会話ができたり、そういう繋がり方もできるんだなって発見がありました。二つ目には「こういう事やります」って言ったら農家の方が余った野菜をたくさん下さったり、お店の方でも賞味期限が近いもので良ければ、と沢山寄付して下さいたり、うちの店で使える商品券をあげるからこれで買い物してくれ、なんて言って頂いたり、ボランティアで参加したい、と声かけて頂いたり、色んな所で皆さんに力を貸して頂けるようになってきたというのがあります。三つ目として、私たちは利用者を貧困家庭のみ、と限定していませんので、本当に必要な方にだけ届いているのか分からない、と思ひながら活動していましたが、利用して下さいの方が、実はちよっと気になっている家庭があるから持って行くよ、と様子を見に行きたいと思ひている所にこのお弁当を口実に行ってくるから、と持って行って下さって、私たちが直接行かなくても次の次、という形で必要な方に届いていく、っていうことが生まれできました。

しかし、ただ、こども食堂を開けて「開いているよ」と言っても、繋がりが無い方は「何やっただろう」と思われて入りづらい。新しい繋がりというのはなかなか持ちにくいので、私たちは外に出ていく事にしよう、と挑戦を始めました。イベントやられている所に炊き出し、という形で参加するとか、自分たちでお祭りを開催して、食支援ということじゃない、楽しいイベントの中で、アウトリーチというのと大げさですが、こんなこともやっています、よかったです来て下さい、とか、必要とされていそうな子供とか気になる家庭があったらこの情報届けてもらえるとうれしいです、と外へ伝える、外に広げていく事にチャレンジし始めました。スタッフも流しうめんやろうか！と盛り上がりだして単純に楽しんでやっています。毎月の定例を楽しみにして下さっている方が現れてきたので、コロナが収まって開催日をかえないことにしました。今やっているのが平日の昼間なので、子供が直接くるといふより今は乳幼児連れのお母さんだったり、ご近所の方、夜ご飯に使って下さる方が多いです。でも、本当に想定していなかったのが、学校に行っていない、不登校の子供たちが来るようになった事です。平日の昼間に来る訳で

例会報告

すから当然学校に行っていない。その繋がりやフリースクールの関連の方も来ていて、そこで出会って、新しい関係が生まれています。今現在高山の中で3~4カ所、うち以外にも子ども食堂があります。それぞれが土日開催だったりとか、夕方にやっているところがあったりとか、特色があつていいなと思います。一個の団体が毎日毎日開け続けるのはとても難しいんですけど、カレンダーにして今日はここ、次はここ、と毎日どこか開いているところがあったらいいなあと思ひながら、横のつながり、子ども食堂ネットワークって本当に少ない数ですけど情報交換したりとか食材のやり取りをしたりとかして繋がっています。

ここまでは子ども食堂の話です。今日のテーマは飛騨の子供たちの現状と課題というテーマですので、本当は子ども食堂やっている中から見えてきたリアルな実態お話できるといいかなと思うんですけど、どうしてもこの地域柄があつたり、最初に話してみたいにセンシティブな内容があると思うので、ここからへんな噂の様に広がっていったりする可能性のことを考えると、子ども食堂の信頼度が落ちる事につながる可能性もあるので、ちょっと今日は本当に広域的な視点から子供達の現状を知ってもらえたらと思います。

厚生労働省の資料では、日本の子どもの貧困率は13.5%であり7人に1人が貧困状態にある、となっています。この貧困、実は日本の数字は相対的貧困で、絶対的貧困とは違います。飢餓状態にいる状態の子が13.5%いるという訳では無く、隠れ貧困と言われる、外から見ただけではなかなか分からない。現在ほんの少しのお金があれば、例えばコンビニでお菓子を買って、それを夜ご飯していたとしても、外から見ても分からないですね。一人で子供がコンビニ来ておにぎり買っているけど誰もそれが大丈夫か？とは思わない。そういう社会状況になっています。服とかも安く買えます。ファストファッションもそうですが、今みんながスマホを持っていて、フリマアプリを使うと300円とかで服が買えてしまいます。今継ぎ接ぎだらけのボロボロの服を着ている貧困状態、という子供たちというのはほとんど出会った事がないです。でも実は日々の生活は結構ギリギリで余裕がなく繋がりがなく孤立している状態です。自分の家庭の中ではどうにも出来ない位抱えてしまって外から見える位にあふれてしまった時には結構大変な状態になっています。日々の生活の中でも困りごとの芽みたいな小さいもので結構あると思います。例えばコロナ禍で2週間くらい仕事ができなくなっちゃったとか物価高騰とか、賃金が下がっているとか。ちょっとした生活苦、子供の中で言えばイジメっていう大きなものでなくとも、学校の中で人間関係がうまくいかないとか、そういう困りごとの芽を持ったときに、繋がりとか居場所がない中で、周囲にSOSを出すことができるのがどうか？また周囲がこれに気づくことができるのだろうか？これがなかなか難しい状態になっていて、それが放っておかれてずっと抱えてしまった結果、生活困窮や不登校やヤングケアラー、児童虐待、子育てメンタル不調、と大きな問題になってしまっています。貧困っていう言葉の中には実は困ったっていう文字が入っています。貧困イコール貧乏、お金がないっていう状態のことではないんです。貧困というのは経済的困窮があつて、そこに繋がりがなく孤独孤立っていうSOSを出せないっていう状態が合わさっている言葉です。経済的困窮については失業給付とか、生活保護みたいな救済措置と言うか、制度みたいなものが少なからずあるんですけど、孤独・孤立、頼れる人間関係がないとか、社会参加の機会がない、居場所がない、なんてことに対する支援っていうのは、実はまだまだ制度としては考えられてないという現状があります。そこをどこが担っているか、と言うと、現在は自助共助公助の中の共助の部分です。市民活動とか、ボランティア活動参加によって何とか支えようという人たちが自主的にやっているのが現状だと思います。十数年前には、もっと人口がたくさんいて、地域の中に大人も子供も年配の方も、いろんな年代の人たちが当たり前暮らしていて、顔が見える近所付き合いみたいなのが

当たり前にあつて、良くも悪くも色々ばれちゃうっていうか、心の繋がりたいなものが豊かで、その時代はまだお互い様とかの精神みたいなもので支えられてきた訳ですが、今どんどん人口が減ってきている中で、地域の中で当たり前に行われてきた事の担い手がなくなって、みんな自分だけ自分の生活だけでいっぱいいっぱい、暮らしの中に本当に余裕がないので、当然繋がりがついているのを持っていない状態です。頑張っている人達がいるんですけど、共助っていうものだけでは、結構危機的な状況になっていると言わざるを得ないと思っています。前半にひだこっぼんの話をしましたけど、ひだこっぼんのこと一つ考えても正直、簡単ではないところがあつて、活動の継続を考えていくと、お母さんたちがやっているの自分達も忙しいとか、必要性が高いと思われる子どもや家庭にこそなかなか手が出せないジレンマみたいなものや、資金面も不安要素であつて、常に今は一応なんとかなっているけど明日はどうか、といった形でやっていると、目を向けたくない部分であるんだけど向けなきゃいけないことかなと思ったりします。

次に今年度新設された子ども家庭庁の資料ですが、この中でも居場所がないことが孤独孤立の問題と深く関係しているとしていて、地域コミュニティの変化、少子化の進行で、地域の中で子どもが育つことが困難になっている。特に過疎化が進展する地方区では一層懸念される、と書かれていて、地域の居場所づくりが課題。今後、そういう場を新たに創出する、意図的に居場所を作り出そうとする営みが必要だというふうに、国も言っています。今の子供達の背景として、複雑かつ複合化した喫緊の課題が出ていますが、児童虐待と並んで不登校問題の増加とか若者の自殺者の増加が挙げられています。精神的幸福度の低い日本の子供達というユニセフのレポートによりますと、先進国38カ国中、日本は乳幼児期の医療等が発達していて身体的幸福度は第一位です。精神の幸福度、自分が幸福だと思えるかになると、第37位、ワースト2位となっています。続いて不登校の子供たちの児童数の推移のグラフですが、児童数は右肩下がりですと減っています。それに対し不登校の子供たちの数はずっと上がっていて、最新22年、この年は全国で30万人に迫る勢いで子供たちが学校に行っていないという状態になっています。ちなみに岐阜県の不登校の数、小学生は47都道府県中8位です。中学生が15位、23年最新の情報です。決して人ごとではない。岐阜県、高山市は少ない、ってことはありません。十代の子供たちの自殺者数の年次推移、これもずっと右肩上がりで上がって行って、高い状態にずっとあります。先程見てもらった通り、子供たちの数は年々少なくなっていますが、自分で命を絶っている子どもたちがずっと増え続けている、という現状がこの国にはあります。令和4年、2022年が最新ですが、この1年間で自分で命を絶った十代の子供たちが796名いました。単純計算すると、毎日毎日毎日日本のどこかで二人以上の子どもが自ら命を絶っているということになります。十代の自殺者数796名と言いましたが、この年の高山市の出生数が501名です。高山で生まれた1年間全ての子供たちの数よりもはるかに多い子供たちが自ら命を絶っているってことです。高山市の自殺死亡率も実は国や県と比較して高い傾向にあります。関係ない数字ではないという事です。もっと言うと、10代の子供達プラスして20代30代までの若者の死因の1位が自殺になっています。病気で亡くなるとか、不慮の事故で亡くなるよりも、多くの子ども若者が自ら命を絶っているのがこの国の現状です。どれも遠い所で起こっている、自分たちの関係ない誰かの話っていうことではないです。実は隣の家の中で何が起きているか、案外知らない、知りようがないです。事件が起ったり子供たちが事件を起こしたりすると、周りの人がインタビューで、普通の人だったよとか、そんな風には見えなかったな、なんて答えているのを見たりしますが、日々の生活の中で生まれる小さな困り事の芽とか、ちっちゃなSOSが周囲にこぼせるような繋がりがだったり、居場所みたいなものが子供達そして大人の中にもあるような地域になっ

例会報告

ていくことを願ってやみません。ボランティア団体や支援機関、行政、それぞれの役割や取り組みももちろん大事ですが、地域に住んでいる住民一人一人が、暮らしの中でちっちゃな繋がりを強くして行く、豊かな日常を作っていくことが、個別の支援と両輪で大事なことなんじゃないかと思っています。

最後に一つだけひだこっぱんのエピソードお話しします。こばん祭りで近所の公園でいろんな団体に参加してもらって、こばんは炊き出しをした時の写真です。この炊き出し、近所の公園でオープンな場所なので、このお祭り目的で来てくれた人だけでなく、通りかかった人が「なんかやってるね」って言って参加して下さったり、混ざれる場だったんです。その炊き出しをやっているところに一人のおじいさんがプラスチックの2Lのペットボトルを切ったものを持って列に並んでいて、私たちが食器を準備しているので、これありますよって言ったんですけど、いや、これでいいって言って、他の子が食器出しているのを見てなんか準備しなきゃと思っておそらく持ってきてくれたんだらうと思ったら、無下にそれはダメだとも言えないので、それに入れて食べてもらいました。子どもたちに「みんなお代わりあるよ」とか言っていたらおじいさんも3回、4回と食べていただいて、その時に「私達こんな活動しているんで、よかったですまた来てください」ってチラシをお渡ししたら、次の開催日に9時ぐらいから準備始めたんですけど、9時半ぐらいにそのおじいさんが来られました。どうしよう、ご飯まだないって慌ていたら、そこで休んでいるからいいよ、っておっしゃったので、なんのお構いも出来ませんが良かったです中に入ってお茶ぐらい飲んでいて下さいって、和室で待ってもらったんですけど、その日ちょうど先程見てもらった朴葉寿司の日で、百個以上作ったかと思いますが、机に朴葉を並べて、みんなで手分けしてごはんを載せていく事やっていたんで、もし良かったら手伝ってもらえませんか？このタケノコ載せていだけでいいんで、ってお願いしたら、分かりましたって手伝って下さいました。その次の開催の時は、なんと自分でエプロンを持ってきて、10時位から来てくれるようになって、そこから毎回ずっと来てくれるようになって、いっぱい食べて帰られるようになりました。いろいろ話をしていく中で、実は数年前奥さん亡くされて一人で暮らしていることだったり、コロナ以前はまだちょっと自治体の中でみんなで話す機会があったりしたんだけど、全くなくなっちゃって、もうずっと一人だからご飯を誰かと食べられるってことだけでも凄く嬉しいとか、こばんのご飯は特別なレストランのメニューみたいじゃなくて、なんか家庭の味だよ、って言って下さったり。何よりも嬉しかったのが、自分の役割がある、何か役に立てる気がするってことが嬉しいって言って下さいました。だんだんと付き合いが長くなって、何やって来たのか聞いてみると、凄く面白い長い歴史を語られたりして、実は包丁研ぎの名人だったと分かって、こばんの包丁は物凄く切れる、なぜなら彼が研いでくれるから、ってことが起こっています。この活動やっていて感じるのは、どんな状況にある人、どんな立場にある人でも、それぞれがみんな誰もが誰かの役に立ちたいという思いを持っているんじゃないかって事です。あるときは支援される側だったかもしれないけど、そうじゃないところで誰かの役に立っていたりとか、誰かを支援する側になっていたりと、支援する側される側といった線だったり役割みたいなものを超えて、それぞれの思いが、それぞれ出来るところで発揮されて、つながって広がっていったらいいなというふうに願っていますし、そういう輪っかの一端に私たちの活動や、個人個人も入っていたら嬉しいなあと思いがやらやっています。生きてるだけで丸儲け 地域みんなの居場所、そんな繋がりのある地域をぜひ一緒に作って行って下さるようよろしくお願い致しますということで、本日はご清聴ありがとうございました。

<ニコニコボックス>

●大村 貴之さん、塚本 直人さん

本日は社会奉仕委員会担当例会です。ゲストのひだこっぱん代表訪を歓迎いたします。後程の卓話を楽しみにしています。下屋会長と平康裕さんは、能登半島地震で被災された七尾 RC を激励訪問のため、我々西 RC と台北東海 RC の支援金目録を携えて、想いを伝えています。皆様ご協力頂きありがとうございました。

●高井 道子さん

今日はこども食堂ひだこっぱんの代表中田 綾乃 様をお招きして、高山の子どもたちの現状についてお話しいただきます。楽しみにしておりますのでよろしくお願ひいたします。

●田近 毅さん、阪下 六代さん、内田 幸洋さん、米澤 久二さん、垣内 秀文さん、鴻野 幸泰さん、杉山 和宏さん、堀 幸一郎さん、水梨 弘基さん

能登半島地震から2か月余りが経ち、東日本大震災から間もなく13年を迎えようとしています。そんな今、被災地に想いを馳せつつ、ここ飛騨地域の今ある安寧に感謝をして。

人間力を高める

第24回

野尻 陽子

「人間力」というと、人として生き抜いていく力や、経験に裏付けされたその人の持つ幅や魅力や個性等を想像します。その人も様々で、今は多様性の時代、多様性・個性が尊重されるようになりました。

私の好きなワインの世界ではよく「テロワール」という言葉を使います。Terroir「土地の個性や風土」という意味のフランス語で、葡萄畑をとりまく自然環境のことを意味しており、それには気候・雨量・風・気温・湿度・日照量・土壌の質・立地や地理的特性等様々な要因があげられます。ワインは醸造酒の中でも単発酵という、葡萄に含まれる糖分をそのままアルコールへ発酵させてできあがるため、その原料である葡萄の品質が、そのままワインの味わいに反映されます。そのため、ワインにはこのテロワールが深く結びついており、その土地・場所ならではの香りや味わいを持っています。例えば、同じ葡萄でも、その土地等によって全く特徴が異なってきます。またその造り手やその土地の伝統的製法等によっても様々な違いがあり、自然だけではなく葡萄畑をとりまく人も、テロワールの一つでもあり、その様々な個性を味わうことがワインの魅力でもあると言えます。

またワイン好きな方はラベルに、V.V ウェイユ、ウィーユ Vieilles Vignes と書かれたのを見たことがあるかもしれません。これは「古木でつくられた」事を意味しています。樹齢の高いものの方が、年を経ることによって根を地中深くに延ばすことで、その土地の個性をより反映し、味わいに複雑味を与えるといわれています。

ワインについての蘊蓄を述べる感じになってしまいましたが、テロワールによってはぐくまれるワインの個性や古木ならではの味わいの深さ等のように、自分が置かれた環境の中で、現実としっかりと向き合い、様々なことを経験し学びながら努力し、自分らしく歳を重ねていきたいと思っています。また、そんな努力で少しでも人間力を高めることができたらと思います。